慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	私の鈴木公雄論(2)
Sub Title	
Author	櫻井, 準也(Sakurai, Junya)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.4 (2006. 3) ,p.123(443)- 134(454)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鈴木公雄名誉教授追悼記念講演会講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060300-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

方々を見るときの目が好きです」とお答えしました。よく世間では、仕事と家庭の両立ということが言われます。でも、私はこの言葉が嫌いです。生意気なことを言いますが、家族が自分たちの生活の一部のように仕事を受け入れていないと、私は気持ちよく仕事はできませんし、自分が一生懸命仕事するのは、そもそも家族があるからです。仕事と家庭は対立的に語るべきものではなく、二つに分けること自体できないものだと思います。私は、先生のお宅に伺って、先生のご家族の会話やお互いを見る眼差しに触れたとき、なんとも言えない感動を覚えたのです。鈴木先生は、ご家族を尊重し、対等な立場の人間として見つめ、お話しをされていました。その時、ここには仕事と家庭などというつまらない二元論はないな、と感じました。ご家族がいらっしゃったからこそ先生の研究があるのであって、私はそこに研究者としての理想の姿を見たように思ったのです。これが私が先生から学んだものの中で、最も大切にしたいことです。

ご清聴ありがとうございました。　（民族学考古学専攻）

私の鈴木公雄論②

櫻井準也

はじめに

櫻井でございます。本日はこのような場で鈴木先生のお話をするということでございますが、先生と共に歩んでいらっしゃった諸先生、諸先輩方を差し置いて、私のような不肖の弟子がお話をさせていただくということで大変恐縮しております。本日は、鈴木先生とのお付き合い、鈴木先生の学問、鈴木先生の教育、そして歴史考古学の未来という順でお話をさせていただきます。

一．鈴木先生とのお付き合い

さて、先生についてお話させていただく前に、「語り部」である私と鈴木先生の関係についてまずお話をしておく必要があると思います。先生と私の出会いは今から二十六年前、つまり一九七九年に遡ります。この年は慶應に民族学考古学専攻が誕生した年にあたります。当時先生はその前年から港区にある伊皿子貝塚の発掘調査をされておられ、そこに参加させていただいたことが先生との最初の出会いであったと思います。私も当時はまだ学部の一年生でしたが、慶應の考古学研究会に入会しており、当然のように専攻に進む前から発掘調査に参加させていただきました。当時は同級生で現在、歴博にいる小林謙一君や栃木の佐野市教育委員会にいる出居博君と発掘現場を荒らしまわって先輩方から顰蹙を買っていました。鈴木先生については一九七四年に雄山閣から『先史学の基礎理論』を出されたことは高校時代から存じておりましたので、私にとって当時の先生は若手の理論考古学者という近づき難い存在でした。そのとき伊皿子では先生と直接お話することはなかったと記憶しておりますが、専攻に入るためのガイダンスが日吉で毎年十二月に

あります。その席に鈴木先生がおいでになって、ガイダンスに来た学生を一人一人呼び出して面接されたときが先生とまともにお話をする最初の機会であったと思います。その席で鈴木先生は、まず「民考でどんなことをやりたいのか」、そして「両親は考古学をやることを知っているのか」、さらに「両親を泣かせていいのか」とまでおっしゃられ、民考とは怖いところだと思いました。三年ほど前にその話を先生にしたところ、「そんなこと言ったかな」とおっしゃっていましたが、いまから考えますと民考を立ち上げた時期の先生の情熱を感じます。その後、二年生から民族学考古学専攻の二期生として、鈴木ゼミに属し、卒論の指導もしていただきました。

その後、大学院の修士課程に進みましたが、その頃の鈴木ゼミの院生は修士の間に一年間か二年間、ご奉公の発掘をすることが当然であったと記憶しています。私にとってそれは、一九八四年から八六年にかけての港区の麻布台一丁目遺跡（正式には郵政省飯倉分館構内遺跡と申しますが）がそれに当たります。当初は縄文後期の貝塚があるといわれて試掘に赴いたのですが、掘ってみると縄文時代の層はなく江戸の大名屋敷が出てきました。当時慶應で江戸をやっている学生など一人もいなかったので全員が落胆したのを今でも鮮明に覚えています。しかし、この遺跡が鈴木先生や慶應の学生を歴史考古学へといざなう遺跡の一つになります。当時、麻布台の発掘調査を担当した調査員は、皆縄文や旧石器の専門家でしたし、近世考古学が確立する前の調査でしたので何がなんだかわからない状況で江戸遺跡と格闘していました。その結果、慶應でも近世を専門にする研究者が次々と出てきたわけです。その後の先生との付き合いといいますと、やはり慶應のＳＦＣ遺跡、つまり湘南藤沢キャンパスの発掘調査ということになります。先生は埋蔵文化財調査室の室長、阿部先生が副室長でした。私は主任調査員ということで、畑ばかりで何もない広大なＳＦＣのキャンパスを試掘調査で歩き回る日々が続きました。この調査は先生にとっても私にとってもシビアな調査でした。開校予定日に間に合わせたい当局とキチンとした調査をしたい調査室とのせめぎ合いの毎日だったと記憶しております。

ＳＦＣの調査が終わった後は、慶應の非常勤講師として博物館学などを担当させていただき、お亡くなりになるまでお付き合いさせていただきました。一時期は研究室が同室でしたので色々なお話をさせていただきましたが、何分不肖の弟子ですのでこの頃になっても先生にはよく怒られました。晩年、先生がご病気になられ、まさかこんなに早くお亡くなりになるとは思っておりませんでしたので、先生ともっと色々な話をしておけばよかったと悔やんでおります。

二、鈴木先生の学問

さて、ここで鈴木先生の学問について考えてみたいと思います。先生の学問の特徴といいますと、一見脈絡のない様々な研究をなさったと思われがちです。ある世代にとっての鈴木先生は「縄文晩期の土器研究者」であり、「セット論の鈴木」であ

ります。そして、ある世代にとっては「貝塚の研究者」、または「漆に被れた研究者（これは亡くなった佐原真先生の言葉ですが）」、そしてある世代にとっては「歴史考古学の研究者」あるいは「銭の先生」ということになります。とにかく引き出しの多い先生だったので、育った時期によって弟子達の先生に対するイメージはかなり違っていたと思います。

ここで簡単に先生の研究テーマの流れを追ってみたいと思います。私が慶應に入った頃には伊皿子貝塚の調査をされており、既に先生は土器研究から貝塚研究に移行されていましたので、貝塚の研究からお話したいと思います。先生はお若いときから多くの貝塚調査をやられてきましたが、最初は土器研究者としての貝塚とのお付き合いでした。その後、赤澤威先生や小宮孟先生との調査や研究から自然遺物にも興味をもたれたようです。その流れが伊皿子貝塚の調査に集約されるわけです。この貝塚は土器や石器などの道具が極めて少ない貝塚でしたが、先生は詳細な調査マニュアルをつくられ、貝層の調査をシステマテックに行いました。そして、評価されるのは貝層のサンプリングとその後の処理を徹底して行われたことです。その結果、細かな遺物を回収するだけでなく、貝塚の貝殻の総量を推定され、そこから栄養量、とくに総カロリーや総タンパク質量を推計し、残された貝の量でどのくらい人口が維持できるかという試算も行っています。その結果、貝だけではたいした数の人を食べさせていくことができないことがわかったわけです。また、その後の先生の縄文時代食料の栄養学的研究は、かつて海外でリチャード・リーのブッシュマン研究が狩猟採集民のイメージを変えたように、肉や魚が必ずしも優れた食品でないことを数値で示すことにより、縄文人の食のイメージを変えることになりました。

次に先生は近世考古学に出合います。港区の済海寺で一九八二年に越後長岡藩牧野家の歴代藩主の墓を調査したことが先生と近世考古学の出会いとなりました。その後、冒頭に紹介しました郵政省飯倉分館構内遺跡や増上寺子院群の調査の調査団長をされました。当時、江戸の遺跡というと、千代田区の都立一ツ橋高校遺跡や文京区の動坂遺跡などが調査されていましたが、江戸遺跡の調査法は確立してはおりませんで、我々は江戸遺跡がどんなものであるかもわからないまま発掘調査を行いました。特に、郵政省飯倉分館構内遺跡の発掘調査は縄文や旧石器をやっている大学院生が中心でしたため、先史時代の発掘調査方法に準拠して行われました。出土遺物を細かくカウントして表にしたり、大きさを測ってグラフを作成したり、遺構の土壌をサンプリングしてフルイにかけたりしていました。これについては特に先生から指示があったわけではありませんが、同じ考古学である限り調査方法は歴史考古学でも同じであるべきだという気持ちはありました。ただその反面、この遺跡は調査法をめぐって先輩後輩関係なく長時間にわたって熱い議論を戦わせた遺跡でもありました。いまの学生さんは知らないでしょうが、当時は「ろくに掘れないのに議論ばかりしている慶應」といわれていました。議論の決着がつかなくて先生には幾度もご迷惑

をおかけしましたが、今から思うと先生はそれを楽しんでいるようでした。このように、先史学的な方法で江戸遺跡を調査したことは今でも正しかったと思いますし、江戸を研究している研究者にはそれが評価されたようです。

続きまして、出土銭貨の研究です。このお話は本来ならば下関市立大学の櫻木晋一先生にしていただくべきですが、ここでは部外者の立場からお話をさせていただきます。先生が銭に興味をもったのは先ほど紹介いたしました港区の済海寺の大名墓調査の際に、一分金が副葬されていたことに端を発します。後に出版した吉川弘文館の『銭の考古学』に述べられていますが、先生は当時の庶民に流行した「三途の川の渡し賃」を副葬する習俗が大名にもみられることに感銘を受けられたようです。その後、港区の増上寺子院群の発掘調査で墓に副葬された六道銭の組み合わせに興味を持たれました。六道銭の研究では考古学で用いられるセリエーショングラムというモノの組み合わせの時間的変化を把握するグラフを使われ、中国から渡来した渡来銭が寛永通宝にすぐに切り替わるのに対し、後の寛永通宝は緩やかに交替していったことを発見されました。その後、備蓄銭へと研究対象を広げられ、時代による銭の流通の仕方の違いから貨幣経済の発達や国家の貨幣政策について発掘資料のデータを用いて追求されました。この研究は歴史学や経済史などの分野との関係の中で考古資料の可能性を引き出した非常に意義のある研究であるといえます。

この研究は、はじめ学生を使って地道にデータを集めていましたが、やがて研究会を作られて自ら研究会の会長となられました。私も当初は墓に副葬された銭の組合せが銭の流通の問題に直接結びつくかどうかにつきまして疑いをもっていましたが、先生はセリエーショングラムという武器を使って最大限の成果を出されたわけです。その当時、綺麗な結果が出て得意そうにセリエーションを見せられた先生の顔を今でも思い出します。

さて、先生の出土銭貨の研究については、それ以前の先生の研究とは異なる部分がありました。それは自ら研究会を主催したということです。櫻木先生など強い味方がおられたせいもあると思いますが、元来、学界の中で組織をつくったり、まとめ役になることを避けてられてきた先生も出土銭貨に関しては別だったようです。その理由は、恐らく今までにないまったくオリジナルな研究分野であったことが原因ではないでしょうか。また、考古学者だけでなく、歴史学や経済史、また日銀の関係者の方々などと交流がありましたが、考古学の方法が有効であることが他の分野において認められたということもその理由であったと思います。

また、出土銭貨については中世に甕などに入れられて埋められる大量の銭を「備蓄銭」というか「埋納銭」というかという議論がありました。鈴木先生が「備蓄銭」といったのに対し、亡くなった網野善彦先生は埋められた場所に呪術的意味がある「埋納銭」であるとして、考古学においてどちらの言葉を使用するかで研究者の色分けがされた時期がありました。しかし、私からみると鈴木先生と網野先生が対立しているという感じで

はなく、鈴木先生も「埋納銭」の場合もあると明言しておりますし、先生は社会経済史というコンテキストで議論しているであって、それをどちらかに決めるなどということは意味がないと思っておりました。一つ一つの事例を丹念に検討することが考古学者の仕事のはずですが、自説を持つわけでもなく騒いでいる中世考古学研究者に情けない思いをすることがありました。お二人ともお亡くなりになりましたが、天国で一緒に笑っておられるのではないでしょうか。

実は、縄文の専門家としての鈴木先生とのお付き合いも長かった私にとって、先生がこのように歴史学や社会経済史へ興味をもたれたことに関しましては、前々からどなたが先生にそのような影響を与えたかということを疑問に思っておりました。しかし、先日、慶應女子高の藤村東男先生から先生がイエールに行かれる前に労働組合の副委員長をなされ、大変苦労されて研究がなかなかできない時期に歴史学の中井信彦先生や経済学の高山隆三先生の薫陶を受けたというお話をお聞きしました。当然私はこの頃のことは知りませんでしたが、中井先生のお話はよくされていましたので藤村先生のお話を聞いて納得いたしました。

さて、次に近現代考古学のお話に移らさせていただきます。先生が晩年になって研究テーマとされました近現代考古学に関しましては、先生は一九八五年頃、さきほど紹介いたしました郵政省飯倉分館構内遺跡から出土した戦時中の防衛食の容器に注目されています。この遺跡は江戸の大名屋敷の遺跡ではありますが、近現代考古学などなかった時代に逓信省時代の遺物や戦時中の銃剣や焼夷弾なども報告しました。先生はその中でも防衛食の容器がいたく気に入られました。当時、一般にはほとんど知られていなかった遺物が戦時下の日本の状況を雄弁に語ってくれるというところに価値を見出されたのだと思います。その後、毎年夏休みになるとアメリカに行かれて、アメリカの歴史考古学についての情報収集をされていたようですが、出土銭貨の研究をやられていたため、その成果を発表する機会はなかったようです。そして、先生は二〇〇〇年になって「古戦場の考古学」という文章を『史学雑誌』に掲載しております。そこでは戦場の考古学的分析、具体的にはカスター将軍が戦死したリトルビックホーンで薬莢や弾丸の分布を分析した結果、騎兵隊とインディアンの布陣が判明し、そこからカスター神話が崩れたこと、そしてこの史跡が「カスター・バトルフィールド・ナショナル・モニュメント」から「リトルビックホーン・バトルフィールド・ナショナル・モニュメントへ」へと変更されたことが説明されています。そして、この遺跡が著名な白人の軍人が戦死した場所からネイティブアメリカンが自分たちの土地を守るために戦った場所へと意味づけが変ったということを指摘され、考古学の成果がアメリカの歴史の解釈を変えさせた遺跡として重要であると述べられました。この論文で先生は、歴史考古学がその国の歴史観を変える力をもっているということを訴えたかったのだと思います。遺跡や史跡の保護や活用の問題だけでなく、考古学は現代社会と深いつながりをもってい

るということは歴史考古学、とりわけ近現代考古学を学ぶことによって強く意識されますが、先生はこの点をもっと追及したかったのではないでしょうか。先生の著作の中の東京大学出版会の『考古学入門』（われわれは黄色い本と呼んでいますが）は他の大学でも教科書として使用され、韓国でも翻訳されているベストセラーですが、その中でも第五章に「考古学と現代社会」という章があります。先生には珍しく感情的な表現が目立つ部分ですが、内容的には他の研究者の引用が多く、私としては気に入らない部分でした。もしこの本を改訂することになったならば、先生はおそらくこの部分を大幅改訂して、リトルビックホーンなどアメリカの歴史考古学の事例を入れながら考古学と社会の関係を鋭く指摘する文章になったのではないでしょうか。

さて、このように、先生はほぼ十年に一回、一見何の脈絡もなく研究テーマを変えているようにみえます。そのことは、今回、東京大学出版会から出版された『考古学はどんな学問か』をみていただければそう思われることと思います。それを称して学界では「変わり身が早い」などと誤解をされていたようですが、私にはそうは思えません。まず、第一に先生の興味の中心はある時代を網羅的に研究することでなく、考古学の理論や方法論にあったということです。そして、港区の発掘調査などで出会った遺跡を具体的な材料にしてその理論や方法論を実践されていかれました。そのためには新たな研究の視点や研究対象を選ぶ抜群のセンスと、その研究の行き先を見通す優れた洞察力が必要ですが、先生はそれを備えていたと思います。私自身も考古学の中で色々な分野に手を出す性癖があり鈴木先生のDNAを受け継いでいる人間であるせいかも知れませんが、先生の研究履歴に関してあまり違和感を感じません。ですから、先生は考古学のある分野の資料を徹底的に集めて一つの時代や地域だけを集中的に研究するという意識はあまりもっておられなかったようです。それは、例えば、縄文時代研究において研究対象が土器や貝塚などに限られることからも窺えます。先生は基本的に住居址などの遺構や石器や土製品などの土器以外の遺物を研究対象として扱いませんでした。また、先生は空間事象に関する研究にも手を出しておりません。弟子たちには空間を扱った研究が数多くありますが、分布論や領域論といった空間事象に関する先生の論文はほとんどないと思います。先生は空間軸よりも時間軸を重要視したということでもありますが、これは常に歴史学しての考古学を意識されていたことが背景にあるのではないでしょうか。

そして、何よりも鈴木先生の生涯の研究を貫いていたのは、遺物を単体でとらえるのではなく、アセンブリッジつまり組み合せで考えるということだったと思います。その考え方は、一九六四年に発表された縄文土器のセット論にはじまり、貝塚の貝種組成、出土銭貨と連綿と繋がっていきます。それを象徴するものがセリエーショングラムの使用だったと思います。セリエーショングラムといいますと、アメリカのジェームス・ディーツや坪井良平の墓石の分析が先駆的な使用例だと思いますが、

先生は貝塚の貝種組成の変化に使用したり、先ほどの六道銭の組成にセリエーショングラムを使用したりと多くの成果を発表され、日本の考古学へセリエーショングラムを普及させました。セリエーショングラムについては、作成方法や再現性の問題で統計グラフとしてどこまで有効であるか疑問もあるのですが、その分、人間臭いグラフですし、モノの組合せの変化の状況を捉えたり、それを視覚的に表現するには格好のグラフだと思います。

また、先生の発想のユニークさ、あるいは目のつけ所の良さという点も見逃せないと思います。この点については、亡くなった佐原真先生とともに最近の考古学界において双璧だったと私は思っております。例えば、縄文土器研究では先ほどあげた土器のセット論、土器型式における時間の問題、土器の実測図の描き方を変えたとされる土器文様の施文工程の研究、縄文人の数の認識の問題、歴史考古学では出土銭貨はもちろんのこと近世の犬猫の墓、防衛食、古戦場の考古学などあげればきりがないと思います。これらは単発の研究も多いですが、このように今までになかった視点を次々と提示するにはやはり学問的なセンスが必要だと思います。こうして先生は考古学の中でいくつもの新たな分野を開拓されました。また、自分の研究を表現するという点に関しましては、文章が非常に平易でわかりやすいということも先生の持ち味だったと思います。それは数多く出されている先生の一般向けの著作を見ていただければどなたも納得されると思います。ですから、先生は弟子の指導においても難解な用語を駆使したり、難しい表現を使った論文に対してはいつも厳しい評価を下されていました。

次に、ここで視点を変えて、先生と埋蔵文化財調査の関係について若干触れたいと思います。先生は港区の文化財審議委員をながらく務められていましたが、中でも増上寺子院群の発掘調査は港区役所の建替えに伴うものでかなり苦労されたようです。しかし、恐らく、先生が埋蔵文化財調査の難しさをいちばんお感じになったのは、一九八八年から慶應が藤沢に新キャンパスをつくる際に行ったＳＦＣの発掘調査だったと思います。この調査は、先生が調査室の室長、阿部先生が副室長、私が主任調査員という体制で始まりました。当時は考古学専攻のある他の大学でも新キャンパスの開設に伴う発掘調査が行われ、どこも苦労していた時代です。この調査では、開校の期日に間に合わせたい大学当局とまともな発掘調査を行いたい調査室という図式で、今回いらっしゃっている関係者の皆さんも含め大変な思いをした調査でした。当時の私などは現場で右往左往するばかりでしたが、埋蔵文化財調査の現実を思い知らされた調査でした。ここでの私の個人的な感想を述べることは差し控えさせていただきますが、ここで言えることは先生の態度は終始一貫していたということだと思います。その辺につきましては、慶應の労働組合の結成三〇周年の講演会の講演記録がありますのでそちらを御覧ください。当時の埋蔵文化財に対する先生の思いが凝縮された講演だと思います。また、このような埋蔵文化財や遺跡保護に対する先生の思いがいつごろから培われてい

ったかについては、最近になって、先生が横浜の南掘貝塚の発掘に参加され、和島誠一先生に傾倒していたことなど若い頃の先生のお話を聞く機会も増えてきました。確かに、私達が学部生の頃のゼミの発表レジュメや先生のコメントを再チェックしてみますと先生が若かりしころの片鱗が窺えるような気がします。

三．鈴木先生の教育

先生の教育方針については、一言で述べることは難しいと思います。私が学部の頃、つまりは先生が四〇代半ば頃までの学生への態度は結構厳かったという印象があります。これはバークレーの羽生淳子さんもよくおっしゃっているところです。しかし、先生が五〇代後半から六〇代になりますと学生にやさしくなられたという印象を受けます。実際の先生の教育といいますと、私の場合は卒論を『史学』に投稿する時点で細かなチェックを受けましたが、それ以降はあまりチェックを受けなかったと記憶しております。卒論指導についても当時は現在のように短期間に繰り返しゼミ発表をしていたわけではありませんでしたので、徹底的な指導を受けたという印象がないというのが鈴木ゼミ卒業生の大方の意見だと思います。しかし、それは先生が学生の指導していなかったということではありません。先生は授業、特に民考特殊の授業などでは必ず自分がその時点で取り組んでいるテーマの授業を行っていました。例えば、先生が銭の研究を始めた頃は学生へのレポート課題が自分の出身地の六道銭や備蓄銭がのっている報告書をあつめて、データベース化して提出することでした。授業で学生に自分の研究の手伝いをさせていたわけです。その当時、学生自身の研究テーマとはまったく異なる作業をさせられて、「かわいそうに」と思っていましたが、当時の学生に聞くと非常に勉強になったといいます。つまり、彼らは一流の考古学者が新たなテーマを見出し、研究を進めてゆくプロセスをリアルタイムで見ることができたわけです。しかも、先生は本当に楽しそうに話をしていますから学生が引き込まれるのは当然です。我々はそんな鈴木先生の後姿を見ながら育ってきたわけです。先生は学生に「ああしろ」「こうしろ」という細かな指導はしませんでしたが、学生に研究の筋道を示して、後は自分でやれという指導でした。そして、面白い研究をすると素直に褒めてくれました。私も色々なテーマで論文を書いてきましたが、私がいちばん嬉しかったことは、先生に抜刷を渡して、しばらくして「この前の論文、面白かったぞ」と先生がおっしゃってくれたことです。

このように、自らの研究姿勢を学生に示すというのが先生の教育方針だったかも知れません。そのお陰で本当に多くの研究者を輩出しました。

また、教育者としての先生を語るときにその影響を与えたのは慶應関係者だけではないという点も強調しておきたいと思います。先生が亡くなられて、四〇代を中心に多くの考古学研究者、しかも名のある研究者が「隠れ鈴木ファン」であったことがわかってきました。その中には先生とほとんど面識のない方

もいらっしゃいますので、先生の著書や論文を読んで影響を受けた方も多かったようです。このように学内学外を問わず先生は教育者としても一流だったわけです。

四．歴史考古学の未来

さて、私がこの場におりますのは、鈴木先生の歴史考古学に対する評価と何らかの歴史考古学に関する発展的なお話をすることが求められていると認識しております。そこで、今回は昨年の民考二十五周年の記念講演のレジュメでその後、『史学』や『考古学はどんな学問か』にも掲載された「歴史学の発達と考古学の未来」をテキストとして話をさせていただきたいと思います。

まず、この中で先生は歴史考古学の特徴について言及されています。まず、それは歴史考古学の位置づけが、日本、アメリカ、欧州という地域によってまったく異なっているということが述べられています。特に北米ではコロンブス以前と以後でまったく状況が異なり、コロンブス以前は異文化であるネイティブアメリカンの世界であり、人類学や民族学の対象でした。そして、コロンブス以後は白人の歴史が対象となります。そして、これがアメリカの歴史考古学のあり方に影響しているということですが、北米の場合、歴史考古学の parent discipline が歴史学であるか人類学であるかが大きな問題であったこと、非考古学系の歴史考古学者の存在が北米の歴史考古学をユニークな存在にしたことをジェームス・ディーツの例などをあげながら論じられています。

次に先生が指摘したのは物質文化研究の重要性です。これは文献史料のもつ限界性から歴史研究者が注目してきたのが、民俗資料や考古資料であったということが強調されています。実際に、北米では初期移民やアフロアメリカンの居住地、当時のプランテーションの発掘調査が行われ、記録を残さなかった人々の生活に関して歴史考古学は多くの成果をあげています。これは歴史考古学の成果には歴史学、社会学、経済学、民俗学といった考古学以外の分野にとって有効な情報や他の分野で高く評価される部分がありうる、ということです。そして、何よりも歴史考古学にはそこに暮らす人々のアイディンティティを喚起したり、修正を迫るような成果が期待されるということが述べられています。ただし、その場合の物質文化研究は考古学にのみ通用するものではなく、より広い分野に対して有効でなければならないとも先生はおっしゃっています。最後に、先生は「二十一世紀の歴史考古学の展望」として歴史考古学の未来について述べられています。そこでは、このような歴史考古学の展開によって考古学的方法がより広い視野で操作される方法体系として整備される必要があることが述べられています。そのためには、北米の歴史考古学が遺物の分析からネイティブアメリカンと騎兵隊の戦闘の状況が復元でき、戦場に対するイメージを白人中心のものからネイティブアメリカンの抵抗へと劇的に変換させる力を発揮したように、「モノの研究」から「コトの研究」へと進展する必要があるいうことです。そして、

「モノの研究」にのみに没頭し、共同研究の前提となる相互理解をする努力をしない日本の考古学者を愁いています。逆に、先生はアメリカの歴史考古学についても、個々には興味深い研究をやっていてもばらばらで、歴史を語るにはあまりにもお粗末であり、日本のように歴史研究の補完としての役割を強めたほうが良いという注文もつけています。

これが「歴史学の発達と考古学の未来」の概要ですが、若干私の感想を述べさせていただきます。まず、歴史考古学はそれが研究される地域の成り立ちや歴史的背景によって意味づけが異なってくるという点に関しましては、まさしくその通りです。その国によって、あるいは地域によって歴史考古学のあり方が異なる、つまり歴史考古学のあり方はその国の歴史や文化を映す鏡であるということになります。そして、場合によっては聞き取り調査も可能であるような時間的に現代に近い時代になると当時の地域や社会が抱えていた様々な問題、例えば差別の問題などが表出してきます。これは歴史学や民俗学などの専門家にとっては当たり前のことかも知れませんが、残念ながら日本の考古学者はそのような問題を避けようとする傾向があります。しかし、私自身、近現代考古学を勉強するようになって、このように考古学が現代社会と結びついた存在であることを認識することが重要であり、考古学は決して「古代のロマン」にのみ依存している学問ではなく常に社会と向き合った学問であるべきだと考えるようになりました。お国事情は異なりますが、先生のおっしゃるようにネイティブアメリカンやアフロアメリカンなどのマイノリティーに光をあて、長い間押さえつけられていた彼等のアイデンティティを喚起することなったアメリカの歴史考古学の姿に見習う部分は多いと思います。その前提が先生のいう「モノの考古学」から「コトの考古学」への転換ということだと思います。わが国の考古学では埋蔵文化財への理解や普及活動といった啓蒙的な色彩の強い活動が長い間主流でしたが、これからは考古学者や行政担当者がもっと地域社会との繋がりを重視する意識をもつ必要があります。そして、歴史考古学はそのきっかけを与える重要な役割を演じると信じております。

また、先生は歴史考古学における物質文化研究の重要性を指摘されました。これはモノを扱えばそれが物質文化研究だという安易な考え方ではなく、物質文化研究には「モノと人」あるいは「モノと社会」との関係を探る大きな目標があります。この点については、文化人類学、民族学、民俗学、社会学、建築学などの分野で優れた先行研究がありますが、モノを扱うことに長けている考古学者こそ、その中心にあるべきです。しかしながら、考古学者は考古学関係者のみに通用する用語を用いて内々の議論を繰り返してきました。確かに先史考古学は考古学の独壇場ですが、歴史考古学は考古学の研究成果だけは何も語れません。そして時代が新しくなればなるほど関連分野との連携が必要になってきます。その連携は単なる役割分担ではなく、互いの分野を理解し合い、ある程度共通の言語を持つことが必要になってきます。その結果、他の学問分野の研究者が期待す

る研究成果が得られると思います。まさしく、物質文化研究は「考古学にのみ通用するものではなくより広い分野に対して有効でなければならない」という先生の言葉は核心をついた言葉であると思います。

このように、先生は歴史考古学における物質文化研究の重要性を指摘したのですが、このまま終わりますと先生の論文紹介で終わってしまい、天国の先生からお叱りを受けそうです。そこで、歴史考古学でモノを扱う場合これから必要になってくる概念について最後に少々お話したいと思います。

それがモノの消費における「階層性」、それに関連する「好み」や「趣味」、さらにはモノに対する「思い入れ」といった問題です。従来の物質文化研究では日常的に消費される物質資料は生活財としてとらえられ、家庭で所有している生活財をカウントして種類ごとや用途ごとに統計をとって集計する作業を行ってきました。しかし、物質資料は必ずしも種類や用途で一律に集計することですべて説明できるとは限りません。これは私が最近、近現代の考古資料を見る機会が多いため、身にしみて感じるところです。実際に海浜別荘地の食器には色鮮やかな「ノリタケ」や「東洋陶器」の製品が多く含まれていますが、同時期の農村や漁村ではこれらの遺物はほとんど入ってきません。これを同じ碗や皿として集計して両者を比較することがあまり意味のないことであることは明らかです。また、それは当然購買者の「好み」や「趣味」を反映するものであるはずです。フランスの社会学者、ピエール・ブルデューはその著書の中で、文化に関わる有形・無形の所有物を文化資本と定義し、このような「選り好み」という行為は第一に教育水準、第二に出身階層に深く結びつく社会的なものであると述べています。これは近代という階層社会の物質文化を研究対象にするならば、当然参考にしなければならない概念です。また、これと関連する消費に関する概念で「ディドロ効果」という言葉があります。ディドロは有名な「百科全書」を編集した人物ですが、この言葉は、消費財は必要だからといってやみくもに購入されるのではなく、その部屋の趣味や雰囲気、他の購入物となんらかの共通性もしくは統一性をもって購入されるという意味です。つまり、購入された物質資料を分析する際に考えなければならないのは代用可能性だけではなく、補完性や統一性という観点からも考えてみなければならないということです。さらに、ローイス・ロジェという学者が「キュレイター的消費」という概念を提示しています。これは特定の所有品には「思い入れ」があり、そのようなものを保存したり、展示したり、譲渡したりするときに所有品に対し一種の責任感をいだくという消費パターンです。この場合、モノの履歴が問題になるのですが、親の形見や結婚式などの記憶を思い起こさせる物品がこれにあたることは誰しも想像できます。

こられのモノの消費に関する考え方は物質文化研究に関連するすべての分野にとって重要な概念ですが、残念ながら従来の歴史考古学において明確に提示されたことはありません。このような概念を取り入れた消費モデルを構築しないで、従来のよ

うに形態、用途、産地といった要素についてのみ検討するだけでは、消費財の実態のごく一部しか把握できないだけでなく、その時代の本質を捉えることはできません。やはり、先生の言われるように考古学の中でのみ通用する議論では駄目であり、他の分野で用いられている概念を導入したり、逆に考古学の方法が有効であることを他の分野の研究者に積極的に示す努力が必要だと思います。私はそれが可能であり、また考古学と社会との関係を緊密にする役割を果たすことができる分野は歴史考古学以外にはないと思っております。

さて、奥様から鈴木先生が歴史考古学についての著作の準備を既にはじめられていたというお話をお聞きしています。残念ながらそれは叶いませんでしたが、先ほどの「歴史学の発達と考古学の未来」は先生がやりとげられなかった歴史考古学に対し指針を示し、後は弟子たちに後を託すという意味で書かれたと勝手に解釈しております。その意味で昨年の二月、私が朽木君とやっている研究会で鈴木ゼミの卒業生を中心に近現代考古学のシンポジウムを開催できたことは本当によかったと思います。そこでは、鈴木先生に記念講演をお願いしていましたが、残念ながら実現することはできませんでした。そのシンポジウムでは、従来の考古学のように遺物や遺構の説明に終始するのではなく、歴史学や文化人類学の若手の研究者も交えて近現代考古学の射程を示し、その将来像について語り合うことができました。先生が目指した歴史考古学に一歩近づくことができたかと思っております。

おわりに

最後に、既にお参りに行かれた方も多いと思いますが、横浜にあります先生のお墓の写真をお見せいたします。下段にモースの『大森貝塚』の図版からとられたバイ貝が刻まれております。貝塚研究者としての証でしょうか。そして、墓碑には「究理」という言葉が刻まれています。これは先生自身が考えられた言葉とうかがっております。ご家族が学者一家であるということもあると存じますが、私からみますとこれから学問を続けていく弟子たちへのメッセージとも受け取れます。周りの雑音に惑わされず学問を究めろとおしゃっているようです。先生が昨年の民考二十五周年の記念講演会で縄文土器や貝塚、さらには出土銭貨といったご自分の過去の研究にはまったく触れられずに、歴史考古学の未来を淡々と語られたことを思い起こします。その時は自らの過去を振り返らず常に先を見つづける学者としての先生の姿に感動致しました。先生が切り開かれた道を進むものとして、そのような先生の姿を一生忘れないでしょう。

それでは、多くの弟子を育ててくださいました先生に感謝しつつ、先生のご冥福をお祈りしながら私のお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（民族学考古学専攻）